

# いつでも見られる

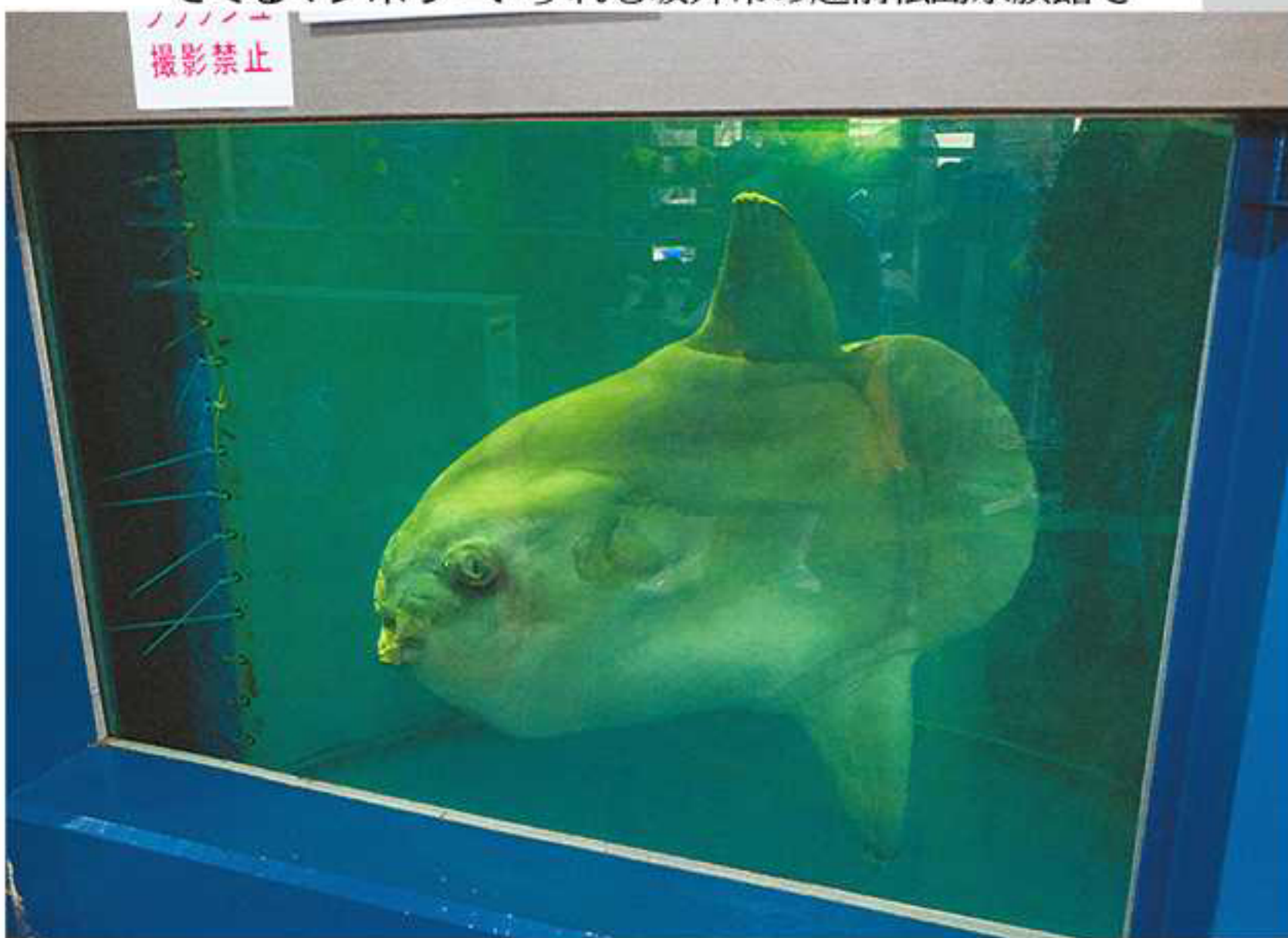
水中から身を躍らせて高く跳びはねるイルカのような華麗さや、よちよち歩きのペンギンのようなかわいらしさには欠けるが、その独特の体形で水族館を訪れた人に強い印象を残す魚、それがマンボウだ。坂井市三国町崎の越前松島水族館はマンボウを常時見ることができ、全国でも数少ない水族館の一つ。北陸地方ではここだけで、二匹いるうちの古参の個体は飼育が五年目に入った。

マンボウはフグの仲間。

寸詰まりのような体形で尾びれはなく、背びれと尻びれを同じ方向に動かして泳ぐ。大きなものは体長三メートルにもなる。越前松島水族館の古参のマンボウは二〇一七年に三重県尾鷲市沖で捕獲され、和歌山県すなみ町立エビとカニの水族館を経て、同年三月に越前松島水族館にやってきた。当初は体長六〇センチに過ぎなかったが、現在では一・七メートル、体重は一〇〇キを超えると推定される堂々たる体格になった。性別は不明。水温が一八度前後に保たれ衝突防止のビニールシートが張られた水槽で悠然と泳いでいる。餌はエビとイカをミキサーにかけてペースト状にしビタミン剤を加えて作った団子。展示課魚類係の飼育員河野大貴さんが、一つ百均の団子七つを午前と夕方に分けて与えている。えさを食べる様子を見せてもらったが、大きなジャガイモのような団子も一飲みとい

## 癒やし系、マンボウ人気

①どこかユーモラスな体形のマンボウ ②えさに寄ってくるマンボウ=いずれも坂井市の越前松島水族館で



う感じでかんでいるのかどうかもよく分からなかった。ただ、体の表面が白っぽくなったのは確認できた。「えさをもらったり、お客さんが光る物を取り出したりと、なんらかの刺激を受けると白くなるようです」と河野さん。

スマートとは言えない体形だが、鈴木隆史館長によると、マンボウは魚類では三本の指に入る人気者だという。河野さんは「漂っているような泳ぎ方が『癒やし系』と捉えられているのでは。ゆっくりしているのが魚類では珍しく、ガラス

## 越前松島水族館

越しに並んでいっしょに顔写真を撮れるのも人気の一因かもしれない」と解説する。同水族館で飼育されている二匹も含め、マンボウは紀伊半島沖で捕獲されることが多い。また、あまり知られていないが十二月や一月には県内の海でも網にかかるという。笹井さんは「今飼っている個体もいつかは死ぬので、漁業者の協力を得て、地元の人ボウを常時見られる水族館にしたいですね」と夢を語る。

物に動じない泰然自若ともとれる外観に似ず、マンボウは生態があまり分かっていないので飼育が難しいという。魚類係長の笹井清二さんは「同じように飼育しても、過去には一週間か一月で死んでしまった個体もありました。急にえさを食べなくなることもあり冷や冷やどきどきさせられ



### 長く見守ってほしい

普通の魚を二つに輪切りにして、前半分に大きな背びれや尻びれ、それに小さな胸びれとおちょぼ口をくっつけたような体形は、美しいとか、かっこいいとは言えないかもしれない。水槽にいるのを見る限り、泳ぎ方もたどたどしくて力強く水中を突き進むというには程遠い。顔もとぼけたような、あるいはふてぶてしいようにも見える。しかし、それらすべてがマンボウの個性なのだ。マグロやカツオ、ブリのような、いかにも泳ぐのが速そうな紡錘（ぼうすい）形、もしくは流線形をしているのだけが魚類ではない。生物は多様なのだ。この独特の体形をしたマンボウを長く見守ってほしい。

#### 取材後記

松田士郎記者

